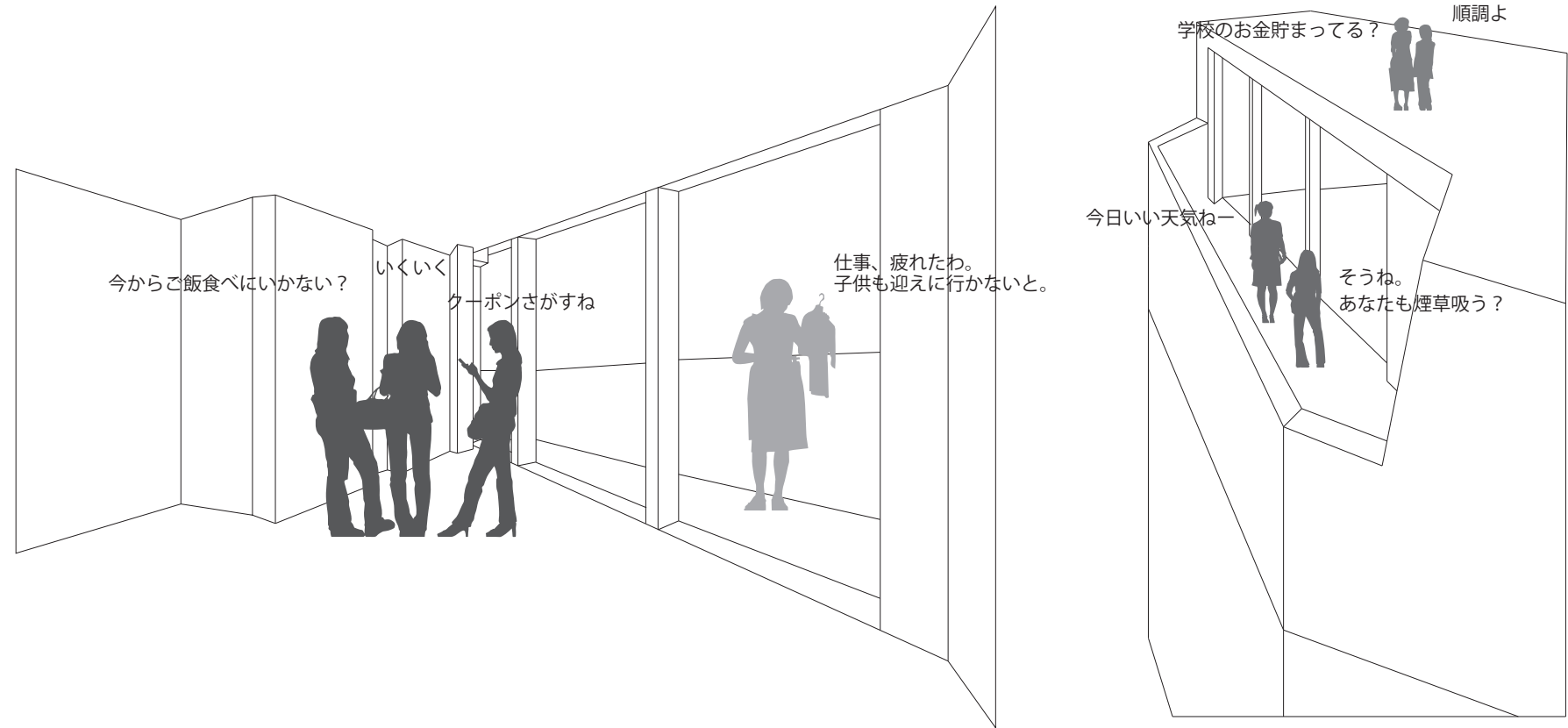
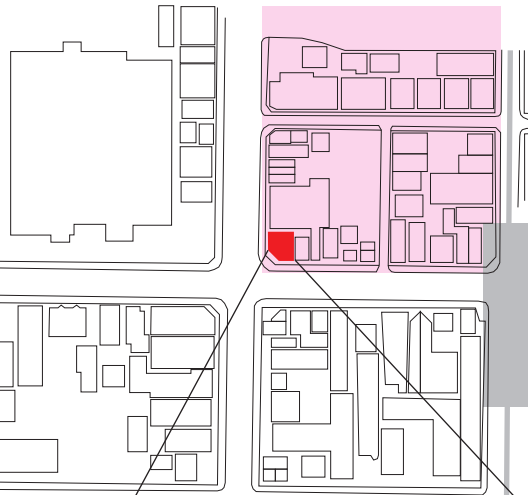


ホステスの為の住宅～歓楽街の残滓に住まう～



■敷地 北海道札幌市北区北 24 条西 4 丁 ■住まう場所（本案では雑居ビル 3F 部分）



- 【田中ビル】
- 1F 酒屋
- 宝くじ
- 2F スナック
- ワイン
- 居酒屋
- 焼き鳥屋
- 3F 空室



敷地周辺は戦後まで飛行場が近隣に位置し、原野がひろがっていた。開発自体は戦後に急速に進んだ。当時札幌市の重要な交通だった路面電車の延伸で北 18 条から北 24 条に延びた事が理由。（現在は廃線しすすきの方面のみ）

スナック、パブ、クラブ、ピンサロ等の風俗店から、料理屋・八百屋など飲食店が多く集積し、近隣大学の学生街でもある。

今現在でも飲食店の数は 400 を越えるが、チェーンの居酒屋や軽食店が多く、キャバクラ・スナック・他の改正風営法対象の店舗は減少。敷地が属する街区周辺はスナックやキャバクラが密集するが、雑居ビルは虫食い状に空室化し、夜間でも明かりのついてない場所が目立つ。

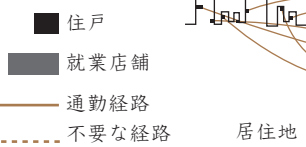
地上階部分は店舗、2 階以上は住宅や飲食店が入っており、空室がないほどテナントが入居していた。

一般的な商店街同様、現在では地上階は店舗もあるが、虫食い状に店舗を開けていたり、2 階以上はテナントが退去して空室になっている。

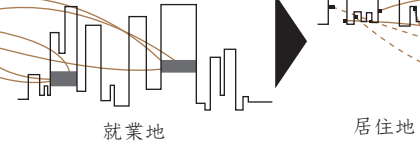
空室になっている部分に住戸やオフィスを入れる（本案では住戸のみ）ことで空室をなくす。住戸の入居者としては周辺の飲食店従事者や近隣の教育機関やオフィスなどで働く人々を想定。また小さな図書館や託児施設などもありうる。ホステスが持ち持ちの場合、託児は必要だと思われる。

■職住混合と顔見知りに住むこと（仕組み）

●従来の廊下と居室だけの形式、居住者は都市勤労者として多様で近隣との接触がなく、関係を作る共通の話題に乏しい



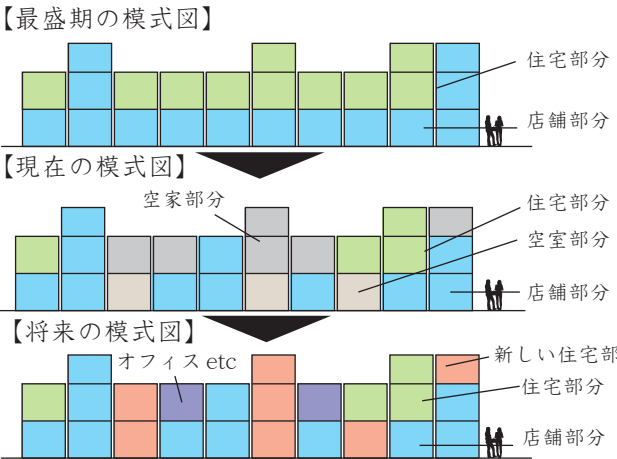
●似通った職業の人々が集まる事は、生活の時間帯等も似通い、仕事上の話題の他、共通の話題をもつ。共有空間を設けてコミュニティをつくり出せる



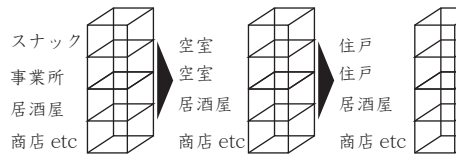
■一定期間の賃貸が滞りなく（住むと言う事）



- ホステスが入居する為、住人の出入がなくなることはなく、常に似た様な年齢層の人が居住する。この仕事もなくなることはない。
- かつて商店街の住人が店で商売をし、店に住んでいたように、飲食店に勤める人々の幾人かが店舗の近くに住む事で、空室をなくすことができ、ある年数を土地に密着した存在にできる



●雑居ビルからのイメージ



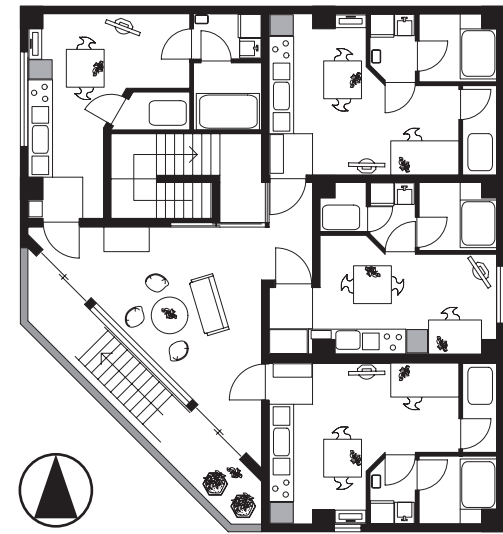
似た職業の人々が集住することで、就業地から遠く離れた居住で近隣と関係が稀薄な一般的な状況を変化させる



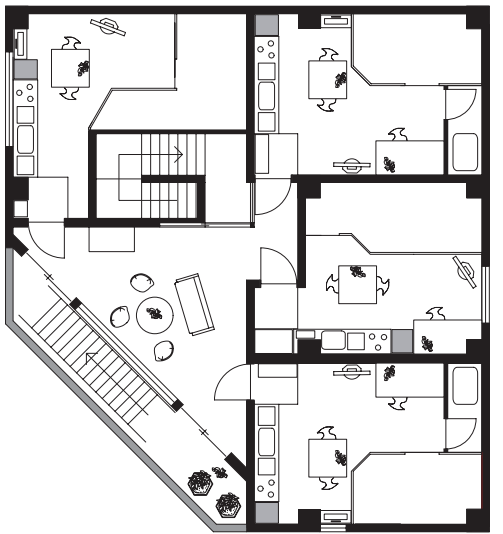
本案ではここにホステスが就業期間の間に賃貸可能な住戸をビル内に設置する事を考える。改正風営法上は深夜 0 時に営業は終了しなければならない。しかしながらスナックなどの飲食店では深夜営業の申請を許可されていれば、終業は深夜の 1 時 2 時となり、従事者の帰宅時間は深夜の 3 時や 4 時となる。従事者の生活時間的特性、土地コンテクストから住まう事を考える。

ここが歓楽街になった最大の鍵は現在地下鉄になっているが、元々市電として整備された鉄道があった事だ。都市内の建築物で空室化している所は非常に多い。その中で、駅周辺の繁華街・歓楽街的部分も例外ではない。市街地拡大に重要であった市電が地下鉄にかわり、現在鉄道は規模縮小を迫られているインフラであるし、市街地そのものも縮小が議論の俎上にある。インフラに支えられてきたほんの小さな繁華街・歓楽街はどの様にその将来像を捉えられるか、商店街ではない、しかし商店街と同時に生み出された地域を対象にここでは提案する。一般的な借り手のなくなりつつある集合住宅ではなく、商店街でもなく、成長という言葉や市街地拡張といったことと共に出来上がった歓楽街の未来はどうなるだろう。

■図面



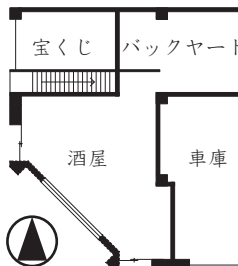
3F リノベーション部分（住居） 1/200



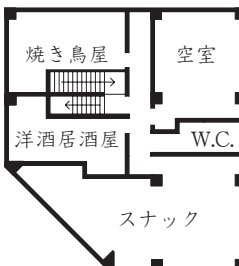
3F リノベーション部分（ロフト） 1/200

■現在の間取り（実測）

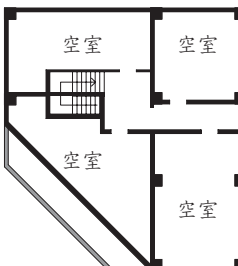
建築年	昭和 53 年 5 月 24 日
用途地域	商業地域
主用途	飲食店
防火地域	防火
工事種別	新築
構造	RC 造・一部鉄骨造
敷地面積	173.82 m ²
建築面積	163.64 m ²
延べ面積	505.252 m ²
(建築計画概要書より)	



1F Plan 1/400



2F Plan 1/400



3F Plan 1/400

